

新テスト構想「段階別表示」に関する一考察

永野 拓矢, 石井 秀宗, 橘 春菜 (名古屋大学)

一連の高大接続改革の検討段階で廃止、あるいは先送りされた新テスト構想の一項目に「段階別表示」がある。1点差刻みの客観性にとらわれた観点から脱し、多段階による表示を行うことを検討していたが、「最終報告」以降は見直しが行われ、段階別表示は記述式にて行うなど限定的な表記に変更された。

本稿ではその段階別表示に着目し、「大学入試センター試験重視型」および「個別試験重視型」に分類して現行入試との可否入れ替わりについて検証した。その結果、配点比率によって可否割合が変動するなど一定の成果が確認出来た。

1. はじめに

1.1 これまでの新テスト導入に向けた検討

高大接続改革に関する検討は、2000年の大学審議会の答申「大学入試の改善について」以降、2014年12月の中教審答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」を踏まえて策定された「高大接続改革実行プラン」を経て2015年3月に「高大接続システム改革会議」が開始され、各ワーキングにて個別選抜の改革や新テスト・評価に関する作業が集中的に行われた。

「大学入学共通テスト（以下「共通テスト」）」は、大学入学希望者を対象に、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを主な目的とし、十分な「知識・技能」が修得されていることを前提に、「思考力・判断力・表現力」を中心に評価するとしている。これは大学入試センター試験（以下、センター試験）が「知識・技能」を問う問題が中心となっており、これからの大学入学者選抜において評価すべき「確かな学力」の在り方に加え、高等学校段階の基礎学力を評価する新テストの導入などを踏まえると、「知識・技能」を単独で評価するのではなく、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」を総合的に評価するものにしていくことが必要として、新評価を加えたテストを2020年度（2021年度選抜）から実施することになった。

1.2 新テスト「段階別表示」構想

センター試験と共通テストの相違点のひとつに評価結果の「段階別」表示がある。「1点刻み」の客観性にとらわれた評価から脱し、各大学の個別選抜における多様な評価方法の導入を促進する観点から、大学及び大学入学希望者に対して、段階別表示による成績提供を行う。段階別表示に関する検討は、新テストワーキングの「学力評価テストに関する作業」にて行われた。

「段階別表示による成績提供」は（中教審,2014）、その後の「中間まとめ」でも堅持されたが（文科省,2015）、「最終報告」では段階別表示への言及は避けられ（文科省,2016a）、同年8月の「進捗状況」においては新テスト全体における段階別表示ではなく、記述式問題において「その特性を踏まえて、段階別表示の具体的内容、項目等が検討される」となり（文科省,2016b）、事実上マーク式の段階別表示構想は見送られ、2017年5月の「進捗状況2」以降は「(点数)成績と段階別表示」の併記に変更された¹⁾ (表1)。方針転換の理由については未発表であるが、高校や大学の意見等に配慮したことが考えられる²⁾。

表1 段階別表示に関する報告書の変遷

<p>【2014年12月】 ○「1点差刻みの客観性にとらわれた評価から脱し、各大学の個別選抜における多様な評価方法の導入を促進する観点から、大学及び大学入学希望者に対して、段階別表示による成績提供を行う。 中教審(2014)「答申」15。</p>
<p>【2015年8月】 ○結果の表示については、個別大学の入学者選抜における多面的・総合的な評価を促進する観点から、大学や大学入学希望者に対し、結果の多段階による表示による提供を行うこと。(以下略) 高大接続システム改革会議(2015)「中間まとめ」44。</p>
<p>【2016年3月】 ○マークシート式問題に加え記述式問題や英語の多技能を評価する問題を導入することによって、これまでの共通テストより以上に、学力を多面的・総合的に評価する新たな枠組みを提供することを狙っている。こうした新たな枠組みが提供されることとなれば、教科の知識に偏重した1点刻みの評価の改革という点については大きく改善されることとなると考えられる。 高大接続システム改革会議(2016)「最終報告」60。</p>
<p>【2017年5月】 ○9. 結果の表示 (前半略) 提供する情報の内容については、以下の事項を含め、今後、プレテスト等の状況も踏まえつつ検討し、平成29年度中に結論を得る。 ・設問、領域、分野ごとの成績 ・全受検者の中での当該受検者の成績を表す段階別表示 高大接続システム改革会議(2017)「高大接続改革の進捗状況について2」35。 ※7月発表「実施方針の策定」も同文を掲載 ※下線は執筆者より</p>

1.3 「段階別表示」テストのイメージ

高大接続システム会議「中間まとめ」では、結果の表示について個別大学の入学者選抜における多面的・総合的な評価を推進する観点から、大学や大学入学希望者に対し、結果の多段階表示による提供を行うことを検討していた。例えば、パーセンタイル値に基づき算出されたデータ、標準化得点、出題分野ごとの正答数や誤答数などである。現行入試でも「面接」や「小論文」等では評価手法として段階別評価が行われているが、それをマーク式や記述式に適用することが今回の入試改革のテーマの一つである。

旺文社は、「学力評価テスト（注、構想当初の仮称）」の「マークシート式」の評価結果が「段階別」で表示された場合、「合否判定の一例として（表2/図1）のような判定の仕方があるとしていた。同社ではさらに、「記述式」問題の評価結果の活用に加え、各大学・学部などの個別試験における評価結果も含めた“多面的・総合的”評価による「合否ライン」の設定には様々な評価手法の組み合わせが想定され、実施には十分な検討を要することを示唆している。

表2/図1 旺文社による新テスト「合否判定例」

5段階に分割した「学力評価テスト（仮称）」と「入学定員（募集人員）」を睨みながら、“受験者を合格ゾーン”／“不合格ゾーン”／“合否ボーダーゾーン①”に大別する「合否ライン」を評価の「段階別区切り」に即して設定する。

次に“合否ボーダーゾーン”に視点を当て、当該受験者を大学側が設定した新たな評価基準①による「評価結果」（例えば、A'～E'の5段階評価）を用いて上記と同様に“合格・不合格ゾーン”と“合否ボーダーゾーン”に分ける。これで最終的な合否判定がつかない場合は、“合否ボーダーゾーン②”の受験者に対して、さらに新たな評価基準②（例えば a, b の2段階別評価）を使って同様の判定を行い、最終的には“数値”化された評価尺度などを用いて判定することもありうる。

旺文社（2016）『どうなる、「学力評価テスト」の活用?』『今月の視点』より引用

2. 研究目的と分析方法

本稿の研究目的は、高大接続システム会議において、当初の構想通りに「共通テスト」のスコアが段階別で表示された場合、個別試験との合計点が現行の入試方式である「センター試験及び個別試験の合計」と比較して合否がどれだけ入れ替わるかを実際の入試から分析して考察することである。

上述の通り高大接続システム会議「中間まとめ」では、結果の表示についてパーセンタイル値や標準化得点等の多段階表示による提供を行うことを示唆していたが、議論が先送りされたことで本稿においていずれの方法も選択せず、科目毎の点数補正等を行わない“現行”方式を踏襲して選択教科・科目の素点を合計し、段階別に集約して個別試験の得点を加え、総合計が実際の入試との合否入れ替わりを比較した。素点を利用した理由は、素点評価を重視する国公立大学の入試システム^{3) 4) 5)}に倣ったことによる。

センター試験の合計点（900点）を得点帯別・段階別に分けて再集計し、それと個別試験（素点）で合計して、実際の合否との入れ替わりについて比較と考察を行った。得点帯は「5段階（得点率20%刻み）」「10段階（同10%）」「20段階（同5%）」「40段階（同2.5%）」の4パターンに分けて（表3）、補正後のセンター試験と個別試験の相関や「補正なし（初期値）」との合否入替り数の比較を行い、段階別表示による現行入試との変化について検証した。

図2がそのイメージである。図1の「（旺文社）合否判定例」を参考にしているが、現行の入試と比較するため、本研究では調査書や資格、そして多面的評価等の総合評価は含めず「①段階別に表示された新得点」および「②個別試験の得点」の合計から比較した。

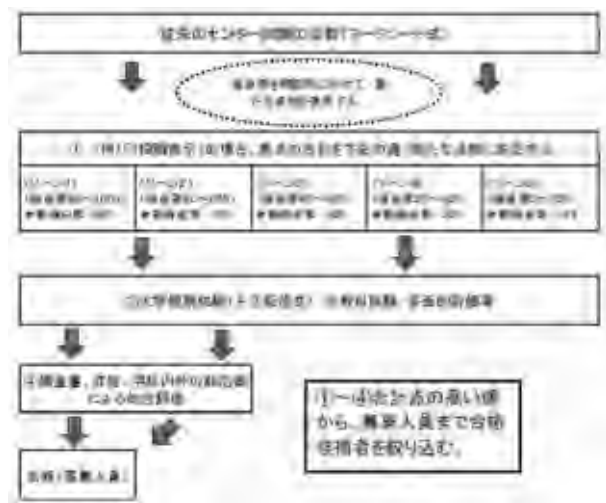


図2 分析に利用した新テストのイメージ

表3 「段階別」表示

「5段階」表示(得点率20%刻み)			「20段階」表示(得点率5%刻み)			「40段階」表示(得点率2.5%刻み)		
ゾーン	得点率(得点帯)	修正得点率と得点 (各ゾーンの中央値)	ゾーン	得点率(得点帯)	修正得点率と得点 (各ゾーンの中央値)	ゾーン	得点率(得点帯)	修正得点率と得点 (各ゾーンの中央値)
1	80%以上、100%以下 (720点以上、900点以下)	90% (720点)	1	80%以上、100%以下 (855点以上、900点以下)	97.5% (877.5点)	1	87.5%以上、100%以下 (877.5点以上、900点以下)	98.75% (887.5点)
2	60%以上、80%未満 (540点以上、720点未満)	70% (630点)	2	60%以上、80%未満 (675点以上、855点未満)	92.5% (832.5点)	2	65%以上、87.5%未満 (855点以上、877.5点未満)	96.25% (866.25点)
3	40%以上、60%未満 (360点以上、540点未満)	50% (450点)	3	40%以上、60%未満 (765点以上、810点未満)	87.5% (787.5点)	3	62.5%以上、65%未満 (832.5点以上、855点未満)	83.75% (843.75点)
「10段階」表示(得点率10%刻み)			4	30%以上、40%未満 (720点以上、765点未満)	82.5% (742.5点)	4	60%以上、62.5%未満 (810点以上、832.5点未満)	91.25% (821.25点)
ゾーン	得点率(得点帯)	修正得点率と得点 (各ゾーンの中央値)	5	20%以上、30%未満 (675点以上、720点未満)	77.5% (697.5点)	5	57.5%以上、60%未満 (787.5点以上、810点未満)	84.25% (758.25点)
1	80%以上、100%以下 (810点以上、900点以下)	95% (855点)	6	10%以上、20%未満 (630点以上、675点未満)	72.5% (652.5点)	6	55%以上、57.5%未満 (765点以上、787.5点未満)	86.25% (776.25点)
2	60%以上、80%未満 (720点以上、810点未満)	85% (765点)	7	10%以上、20%未満 (585点以上、630点未満)	67.5% (607.5点)	7	52.5%以上、55%未満 (742.5点以上、765点未満)	83.75% (753.75点)
3	40%以上、60%未満 (540点以上、630点未満)	75% (675点)	8	10%以上、20%未満 (540点以上、585点未満)	62.5% (562.5点)	8	50%以上、52.5%未満 (720点以上、742.5点未満)	81.25% (731.25点)
4	20%以上、40%未満 (450点以上、540点未満)	65% (585点)	9	5%以上、10%未満 (495点以上、540点未満)	57.5% (517.5点)	9	47.5%以上、50%未満 (697.5点以上、720点未満)	78.75% (708.75点)
5	0%以上、20%未満 (405点以上、495点未満)	55% (495点)	10	0%以上、5%未満 (405点以上、495点以下)	52.5% (472.5点)	10	45%以上、47.5%未満 (675点以上、697.5点未満)	76.25% (686.25点)

表4 A大学の入試概要(X年度)

分析に利用した 学部入試の特徴	センター試験と個別試験との 相関係数 ※1 ※2	合否入れ替わり率 ※2 ①センター試験 ②個別試験
B学部 (個別試験の配点重視型)	0.518** (0.518**)	①6.7% (10.0%) ②38.3% (38.3%)
C学部 (センター試験の配点重視型)	0.566** (0.522**)	①12.5% (7.9%) ②20.5% (16.7%)

※1 **相関係数は1%水準で有意(両側)
※2 ()は前年度

3. タイプ別の入試分析

分析に利用した入試は、X年度実施のA大学の2学部である(表4,便宜的にB学部,C学部と称す)。当該学部はいわゆる「選抜性の高い大学」に属する⁶⁾。当該学部の選択理由は、入試配点が「個別試験」重視と「センター試験」重視に分かれることで、タイプが異なる入試の比較が可能であることによる。これは個別重視型の入試は全国の国公立大学において選抜性の高い大学や学部が採用し、センター試験重視型は主にそれ以外の大学で実施していることから、双方を分析することで全国的な国公立大学入試の傾向を確かめる汎用性の高さから当該学部を選んだ。

入試形態は、両学部ともセンター試験各科目の配点圧縮や傾斜などは行わない一般タイプである。入試概要による比較では、センター試験と個別試験の相関は「センター試験重視型」(0.566)が「個別試験重視型」(0.518)よりもやや高かったが、いずれも0.5を超えるなど高い相関がみられる。この要因はA大学の入試自体が選抜性の高いことから「センター試験も個別試験も総じて学力が高い」者による受験が多いことが示されているといえよう。

また、「合否入れ替わり率⁷⁾」に当てはめると(木村・林,2016)、「個別試験重視型(B学部)」においては「個別試験入れ替わり率(②)」が個別試験(配点)重視の場合に高いことが明らかになった(①6.7%に対し、②38.3%)。一方で「センター試験重視型(C学部)」ではセンター試験「重視」であるものの、入れ替わり率は「個別試験入れ替わり(②)」のほうが高率であった(①12.5%に対し、②20.5%)。これは当該大学の選抜性が高い大学のため、配点比率に影響されることなく合格者の学力はセンター試験・個別試験がともに総じて高かったことが主要因として考えられる。以上から本稿では、「センター試験の段階別新得点+個別点」の合計で変動した合否入れ替わりに関する分析と考察を行う。

3.1 個別試験重視型の「段階別」分析

個別試験の配点重視型であるB学部入試の、補正前の散布図ではセンター試験と個別試験の傾きは1.7あり、個別試験の配点比率の影響がみられるが(図3)、上述の通りセンター試験と個別試験の相関は0.518と低いことから、合格者の多くは「センター試験も個別試験も両方出来る」学力の高い受験生が多かったことが窺える。

センター試験の段階別表示による合否の入れ替わり一覧をみると、20%刻みの「5段階」ではセンター試験の得点が実質2段階しかないことで相関は0.287と低く⁸⁾、結果的に個別試験の出来で合否が大きく左右することが、補正前の合否入れ替わり比較からも確認できる(表5,図3)。ところが10%刻みの「10段階」から相関係数は上昇し補正前に近づく。特に「20段階」以上は、補正前の合否入れ替わりも少なくなり(X年、X-1年も1人)、個別試験重視型では「10段階」であれば現状入試との差は小さいといえよう。一方で何段階に分けても合格最低者が複数発生した。厳格化された定員管理の問題を懸念するが⁹⁾、こちらは新設の「多面的・総合的評価」にて別途加点することで解消すると考えられる。

表5 「個別試験重視型」段階別表示後の諸数値

(B学部)	相関係数 ()は前年度 (x-1年度)	補正前との合否入れ替わり率(%) ※()は前年度(x-1年度)	合格最低点での同点率(%) ※()は前年度(x-1年度)
素点(補正前)	0.518** (0.518**)	—	—
5段階	0.287** (0.211**)	8.3 (10.0)	1.7 (0)
10段階	0.460** (0.436**)	1.7 (5.0)	1.7 (3.3)
20段階	0.484** (0.537**)	1.7 (1.7)	5.0 (1.7)
40段階	0.505** (0.522**)	3.3 (1.7)	0 (0)

**相関係数は1%水準で有意(両側)

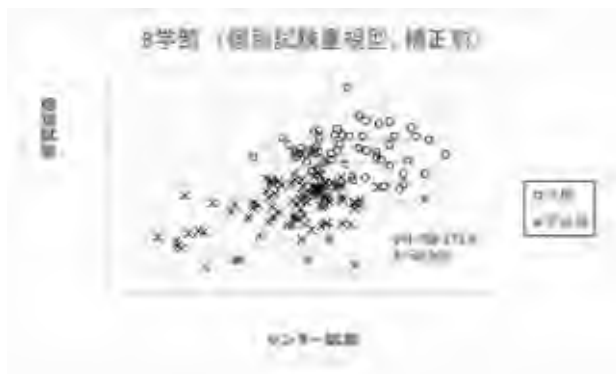


図3 補正前「個別試験重視型」の合否散布図

図4はB学部（個別試験重視型）の得点帯による段階別表示後のセンター試験と個別試験の段階別散布図である。20%刻みの「5段階」表示では、『例えばセンター試験 61%でも 79.9%の者でも同じ得点帯（70%）の表示』となることで、マーク式テストでは差がつきにくい。よって個別試験の点数にて合否が分かることから5段階程度の表示で利用するには「資格型」にとどまると考えられる。ただし「10段階」では、相関係数も高まって合否の入れ替わりも少なくなり、さらに「20段階」以上では補正前に近い分布となり、現行入試との差は小さいといえる。

3.2 センター試験重視型の「段階別」分析

センター試験の配点重視型であるC学部ではどうか。当該学部の補正前の散布図（図5）によればセンター試験と個別試験の傾きは1.0を下回るが（0.72）、相関は0.566と「個別試験重視型」との差は小さい。センター試験重視型の入試形態であるが、センター試験の得点がやや低くても、個別試験で高得点を挙げて逆転合格を果たす学力の高い層が一定数含まれていると考えられる。選抜性の高い大学らしい特徴が示されているといえる。

センター試験の段階別表示による合否の入れ替わりは、20%刻みの「5段階」では相関が0.424と「個別試験重視型」（0.287）よりかなり高かった（表6）。これは上述の相関同様に、センター試験重視型であるが、「センター試験逃げ切り狙い」ではなく個別試験も高い者が多く受験したことを示している。しかしながら「補正前」と比べ全合格者の13.4%もの合否入れ替わりがあり、また「10段階」でも10.7%と「個別試験重視型」（8.3→1.7%）と比較すると対照的であった¹⁰⁾。これは相関こそ高いが、合格最低点付近の者は上位と比較すると個別点は高くなく、その結果合否が入れ替わったことと考えられる。これは「20段階」で3.6%

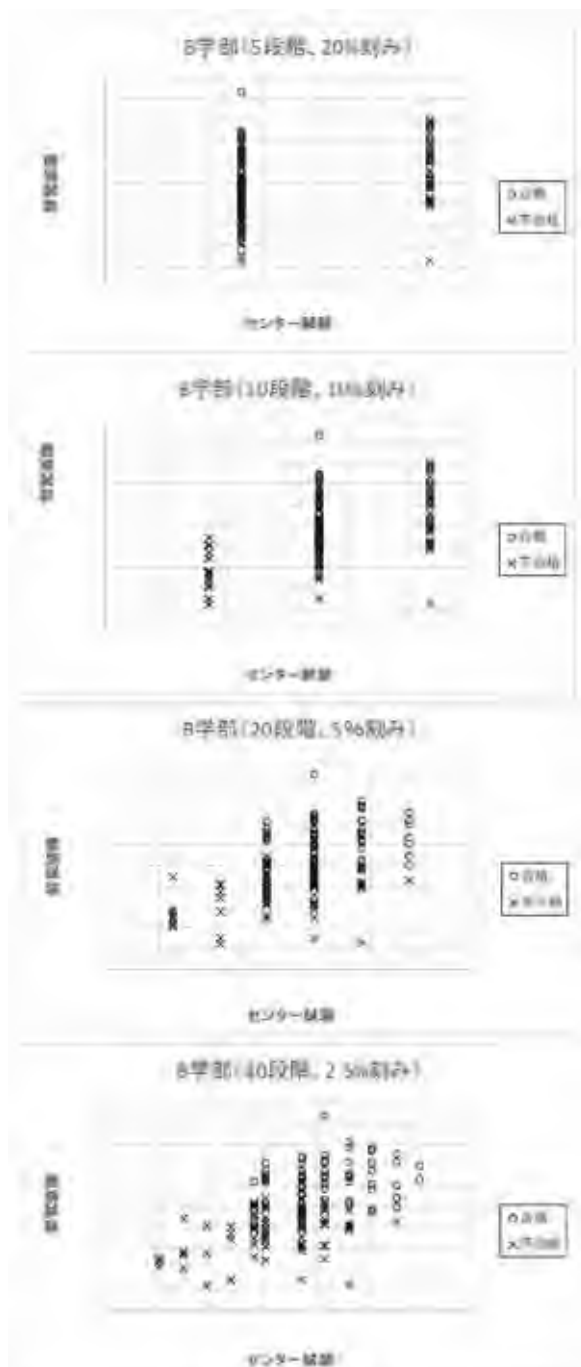


図4 「段階別」に分けた散布図（個別試験重視型）

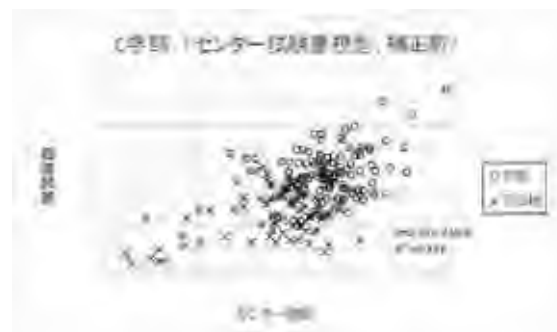


図5 補正前「センター試験重視型」の合否散布図

「40段階」でも2.7%あるなど、「個別試験重視型」と比較すると安定しない。

相関は高いものの補正前の合格者と一致していないことから、センター試験重視型では合否が入れ替わりの割合が高いことを認識する必要がある。

図6は「センター試験重視型」の段階別に修正した一覧である。「5段階」でも相関が0.4を超えるなど、個別試験重視型とは異なる高い相関が確認出来た。以後、「10段階」「20段階」と緩やかな上昇がみられる。

表6 「センター試験重視型」段階別表示後の諸数値

「センター試験重視型」			
(C学部)	相関係数 ()は前年度 (x-1年度)	「補正前」との合否入れ替わり率(%) ※ ()は前年度(x-1年度)	合格最低点での同点率(%) ※ ()は前年度(x-1年度)
素点(補正前)	0.566** (0.522**)	—	—
5段階	0.424** (0.421**)	13.4 (7.9)	0 (0)
10段階	0.535** (0.475**)	10.7 (5.3)	0 (1.8)
20段階	0.557** (0.508**)	3.6 (3.5)	0 (0)
40段階	0.557** (0.528**)	2.7 (1.8)	0.9 (0)

**相関係数は1%水準で有意(両側)

4. むすび

現行入試で比較が行いやすい国立大学の2学部を選び、センター試験を段階別に分けてそれを個別の点数を合計して合否の入れ替わりについて比較した。「個別試験重視型」では、「10段階」で修正前(素点の合計)との相関に近づき、さらに合否入れ替わりも少数であることから、10段階程度で現行入試との差が小さくなることが分かった。一方で「センター試験重視型」では、センター試験と個別試験の相関こそ「5段階」から近接していたが、合否の入れ替わりが落ち着くのは「20段階」以降であるなど、個別重視型との違いが確認出来た。

勿論これらの結果は、選抜制の高いA大学の一事例であり、大学や入試配点等の違いによって結果が異なることも想定される。他大学の同様の調査を待って結論づけたい。

大学としては入学定員超過の厳格化によって同点層に対し厳密に合否を振り分ける必要がある。段階別表示では「1点刻み」の機能を失うことで、同点多数の懸念が生じるが、新しい入試では上記の評価に加え、新たに多面的評価等が加わることで、多評価から合格者が選ばれることでその問題も解消に向かうと考えられる。

しかしながら、ベネッセ調査(2013)によれば、「多面的評価を6割の高校が肯定的にとらえているものの、

評価の負担・方法、指導方法等の不安は高い」とあった。これらの懸案要素を踏まえて実行することがこの度の高校及び大学教育改革であるが、まさに大学入試を絡めて一体的に改革することが新入試の成否を分けることといえよう。

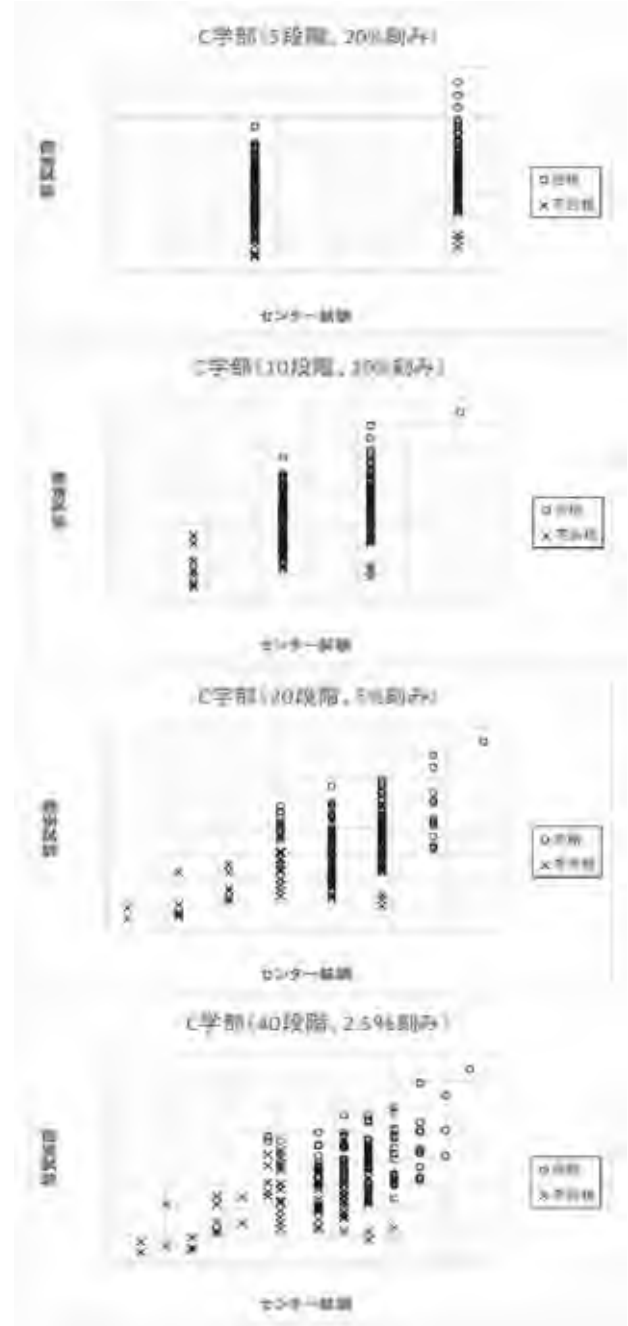


図6 「段階別」に分けた散点図(センター試験重視型)

注

- 1) 高大接続システム会議の「最終報告」以降に、文部科学省から「進捗情報」が発表されたが(同年 8 月、「高大接続改革の進捗状況について」)、段階別表示に関する記載は「記述式問題」に限定した表記とされていた。
- 2) 段階別表示に関する懸念は、「高大接続に関する調査(結果速報)」ベネッセ教育総合研究所アンケート(2014)等から。「達成度テスト(発展レベル)の結果の段階別表示」については、高校・大学ともに賛否が拮抗した(高校;賛成 32.2%, 反対 31.3% 大学;賛成 30.5%, 反対 27.4%)。自由記述では「順位や合否が決めづらい」等の声が多くあがっている。この他、高大接続に関するセミナーやシンポジウムの質疑応答でも高校や大学側から懸念を含む意見がその都度寄せられていた。
- 3) 国公立大学の一般入試では、センター試験後に自己採点を行い、その合計点等と志望する大学の個別試験の科目数や配点等から合格可能性を探り(これまで受験した受験産業主催の模擬試験の合格可能性などを参考に)、最終的に出願校を決定する流れが、近年の高校による進路指導の一般型である(高校教員、および受験産業担当者からのヒアリング等から)。
- 4) 段階別を重視する例としてはアメリカ合衆国の SAT がある。2016 年度より改訂され、2 領域(Evidence-Based Reading and writing, Math)の合計(満点)を 1600 点として、各領域 200~800 点、10 点刻みで表示される(122 段階)。必須のエッセイはオプションとなり、そのスコアは別記される。
- 5) 素点の弊害として科目による難易(平均点)格差が指摘されているが、センター試験では本試験の理科、地歴 B、公民の教科の各科目の平均が 20 点を超えて、かつ試験問題の難易差に基づくものと認められた場合に「分位点縮小法」によって得点調整が行われる。これまでに実施されたのは平成 10 年度(地歴)と 27 年度(理科②)である。
- 6) 中教審高大接続特別部会(2014)第 20 回「高大接続特別部会における答申案とりまとめに向けた要点の整理(案)」からの 8~9 ページ「①各大学の個別選抜改革」より。『選抜性が高い大学』『(同)中程度の大学』『(同)機能しなくなっている大学』に区分されている。
- 7) センター試験と個別試験の 2 つの成績指標の総得点で合否を決定する際の受験者の得点分布図を楕

- 円状に示し(横軸にセンター試験、縦軸に個別試験の点数)、合格者群の特徴を 4 つに分類する。その際、「センター試験を課したことによる合否入れ替わり率」と「個別試験を課したことによる合否入れ替わり率」を定義し、「センター試験」および「個別試験」によって合格した人数からそれぞれ全合格者数を除して割合を出す。
- 8) 当該学部入試の大半の志願者は、センター試験の得点率「80~100%」と「60~80%」の 2 ゾーンに集中するため。
 - 9) 例えば国立大学の場合、一定の入学定員の超過率を超えた学生納付額について、運営費交付金から学生納付金相当額を国庫に返納する措置がとられており、2016 年度から段階的に厳格化されている(充足率が一定数より不足した場合も同様)。
 - 10) 前年度(X-1)は X 年度より割合は小さいが、「個別試験重視型」と比較すると依然として高い。

参考文献・資料等

- ベネッセ教育総合研究所(2013)。「高大接続に関する調査」, III 21. 『2-9.多面的な評価について』
- 中央教育審議会(2014)。「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について~すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために~(答申)」
- 木村拓也・林篤裕(2016)。「個別大学からみた大学入試センター試験の頑健性——合否入れ替わり率を用いた検討——」『大学入試研究ジャーナル』26,1-8.
- 文部科学省(2015)。「高大接続システム改革会議 中間まとめ」
- 文部科学省(2016a)。「高大接続システム改革会議 最終報告」
- 文部科学省(2016b)。「高大接続改革の進捗状況について」
- 旺文社(2016)。「どうなる、「学力評価テスト」の活用!?!」『今月の視点』10-11.